

1. 題目と章立て

〔題目〕

中国西北部における知的障害者とその家族の「新しい社会性」
—中間的領域／組織をめぐるエスノグラフィー—

〔章立て〕

序章

1. 問題意識と論文のテーマ
2. 先行研究、当該テーマの位置および独自性
 - (1) 中国の障害／者を対象とした研究
 - (2) 障害者家族の社会学的研究
3. 分析の視点
 - (1) 「新しい社会性」の実証的考察
 - (2) 中間的領域／組織
4. 研究の方法
 - (1) 調査地の選定理由
 - (2) 調査の対象と内容
 - (3) 調査者の立場性
5. 本論の構成

第一部 中間的領域／組織の役割からみる「新しい社会性」

第1章 中国政府の障害認識と政策理念

- 第1節 障害の概念形成
 - 第2節 政策理念からみる障害認識
 - 第3節 法整備にみる政府の障害認識
 - 第4節 障害者社会保障管理体制と障害者連合会
- 小括

第2章 中国的ソーシャルワークと民間組織

- 第1節 「社会工作」
 - 第2節 「機構」について
 - 第3節 「社会工作」と「機構」のかかわり
- 小括

第3章 高等教育機関の教員による「機構」の中間的領域／組織の役割

第1節 大学における「社会工作」教育の困難

第2節 高等教育機関の教員による「機構」

小括

第4章 知的障害者支援組織「慧霊」の中間的領域／組織の役割

第1節 知的障害者支援組織「慧霊」

第2節 蘭州市の「慧霊」

小括

第5章 知的障害児教育支援センターの中間的領域／組織の役割

第1節 X 知的障害児教育支援センター

第2節 親の立場からみるX知的障害児教育支援センターの役割

小括

第一部小括

1. 中間的領域／組織としての「機構」の役割
2. 中間的領域／組織の共生論理
3. 中国の障害／者を対象とした研究への新たな知見

第二部 障害者家族の「新しい社会性」

第6章 中間的領域／組織の経験－母親の回復と専門家の役割－

第1節 Aさんの語り

第2節 考察

第7章 「家族回帰」と個人の自立－自己実現を追求する母親－

第1節 Bさんの語り

第2節 考察

第8章 「家族回帰」と個人の犠牲－祖父母の関与をめぐって－

第1節 祖母Cさんと主夫となった父親の語り

第2節 祖父Dさんの語り

第3節 祖父母との複雑な関係を語る母親

第4節 考察

第9章 「家族回帰」と中間的領域／組織のはざま－混沌と期待を語る母親－

第1節 Mさんの語り

第2節 考察

第二部小括

1. 当事者の他者とのかかわりからみる中間的領域／組織の経験、意味
2. 中国の障害者家族の「家族回帰」の多面性
3. 障害者家族の社会学的研究への新たな知見

終章 知的障害者とその家族の「新しい社会性」

1. 「新しい社会性」の検討

- (1) 中間的領域／組織の役割と「家族回帰」の多面性
- (2) 閻の「中国社会の個人化」論との対話

2. ポスト社会主義人類学への新たな知見

- (1) ポスト社会主義的状况にある中国の特殊性
- (2) 中国的なソーシャルワークの含意

3. 本論の限界と今後の課題

付記

文献目録

謝辞

2. 論文要約

本論は、中国の障害者とその家族の「新しい社会性」とは何かという問いを解明することにより、2000年代以降の中国のポスト社会主義的状况が、障害者とその家族にどのような影響をもたらしているのかを明らかにすることを目的とする。従来の中国の障害／者とその家族を対象とした研究では、制度・政策が当事者の人権と権利に与える影響が批判的に検討され、欧米で提唱されてきた「障害の社会モデル」への到達を理想とする、パターンナリスティックな観点からの政策提言に主眼が置かれてきた。このような立場に対し、本研究では、中国独自の社会主義が形成してきた社会・文化に生きる個々の障害者とその家族の生の営みに焦点を当て、個人と家族、家族と社会／国家の結びつきのあり方を解明する。

このような問題意識のもと、閻雲翔（Yan, Yunxiang）の提唱した「新しい社会性（new sociality）」を参照し、その内実を、中間的領域／組織と「家族回帰」を分析概念として検討する。「新しい社会性」とは、「中国社会の個人化」の中で、家族もしくはその他の社会集団の代表ではない、一人の人間が、個人と個人の間で、社会における活動を通して互いに影響を与え合うこと〔閻 2012(2009) : 338〕を特徴とする、個人とその結びつきの新たなありかたである。2000年代以降の社会環境が作り出す中国の社会文化的な状況を、本研究では、「ポスト社会主義的状况」と捉える。すなわち、共産党の管理と指示に従って行動する必要がある、かつ個人化という「新しい社会性」が生まれている社会状況である。更に閻は、「中国社会の個人化」が欧米のそれと異なる点について次のように指摘する。中国では、国家主導のもとで急速に近代化が推進された一方で、文化的民主が浸透しておらず、福祉制度の整備が進んでいないため、社会が個人を受容するメカニズムが未発達である。そのため、

個人は、新たなセーフティーネットを求めて、解き放たれたはずの家族や私的な関係網へ戻される。孤立した個人にとって家族が唯一の保護の場、帰属感を得られる場となる〔閻 2012(2009) : 342-343〕。つまり、「家族回帰」の現象である。

しかし、閻の見解は、中国に特有の個人主義や個人と家族の関係に言及してはいるものの、欧米の近代化論に立脚した理論的考察に留まっており、実際に中国において個人の間で結ばれる人間関係や組織の性質に関する実証的研究に基づくものではない。これらを踏まえ本論では、障害者とその家族について、中間的領域／組織と「家族回帰」の関わりを検討した。

本論は以下のような構成と内容から成る。

序章では、(1) 中国の障害／者を対象とした研究と (2) 障害者家族の社会学的研究に関する先行研究を整理しながら、本研究の課題を示し、方法論を記述した。

第1部では、国家と中間的領域／組織の層を対象に、中間的領域／組織としての「機構」が、障害者とその家族にとってどのような役割を果たしているかということについて、3つのタイプの異なる「機構」を事例に考察した。「機構」の議論に入る前に、まず、議論の前提となる事項、すなわち、中国における障害の捉えられ方、国の障害者福祉政策、障害者にかかわる法整備について確認し、次に、中国語で「社会工作」と訳される中国のソーシャルワークの歴史と変遷を整理した。これらの知識を踏まえて、3つの「機構」が中間的領域／組織として、国家との相互行為のもとで、障害者とその家族にとってどのような役割を果たしているかを明らかにした。第1部を構成する第1章から5章までの概要は以下の通りである。

第1章では、1949年以降、知的障害が可視化されるプロセスを考察し、中央政府の障害認識について検討した。具体的には、障害者をめぐる教育、福祉、労働に関する政府の制度・政策、そして障害者に関連する法規や組織を概観し、それらを通してみられる、中国における知的障害者の社会での位置づけられ方、政府の障害観を記述した。考察を通して次のことが明らかになった。まず、視覚障害と聴覚障害のある子に対しては、1949年以前に民間レベルで教育が始まり、それが1949年以降、政府に引き継がれて教育が整備されていったのに対し、知的障害のある子は、1950年代後半の大躍進期に初めて公的教育の対象とされるまで、明確に認識されることなく家庭の外へ出ることがなかった。次に、政府の福祉政策は、労働政策と切り離されておらず、障害の有無よりも、労働能力の有無の方が優先されてきた。労働能力がないが家族のいる人は、政策の対象からこぼれ落ちてきた。最後に、1980年代以降、政府は、障害者のための法整備を行ない、関連条例を制定して障害者の労働、教育の権利を擁護してきた。更に、2000年以降、政府は、障害者を隔離して特別な対応をすることから、健常者の社会の中で生きる場を与え、それぞれの居住地域で支援を施していく方針へ転換させた。しかし他方で、優生思想に基づく障害の「予防」政策が同時に取られ、関連法案には、家族の責任のもと、自助努力を前提とすることが貫かれている。こうした矛盾し

た状況は、健常者の障害者に対する差別・偏見を助長するとともに、障害のある人の「家族回帰」をいっそう促すことが予想される。

第2章では、中国的ソーシャルワーク（「社会工作」）と民間組織がどのような関係にあるのかを整理した。まず、中国のソーシャルワークがどのような変遷を経て現在の内容となったのか、その経緯を概観し、中国のソーシャルワークの独自性を指摘した。次に、民間組織の分類方法と政府との関係を記述し、本論で用いる「機構」の位置づけを確認した。「機構」は、中国で鍛えられて血肉化された「社会工作」という中国独自のソーシャルワークの理念とともに存在するものである。そのため中国の社会的文脈の中で、実証的に考察することによってのみ、「社会工作」の内実と社会に対する影響を明らかにすることができると思う。

第3章では、政府と関係の近い、国立大学教員の任文啓教授によって設立された「機構」を事例に、高等教育機関の教員による「機構」の中間的領域／組織の役割を検討した。任教授は、大学で「社会工作」を専攻する学生を指導する傍らで、甘肅北辰社会サービスセンターという「機構」を立ち上げ、学生とともに近隣住民の支援を行なっている。任教授は、蘭州市政府の「三社連動」（「社区」、社会組織と「社会工作」の専門人材が連動するサービスの仕組みのこと）のプロジェクト費を獲得し、政府の住民統治組織の「社区」を拠点に活動を展開していることから、甘肅北辰社会サービスセンターは、官学連携型「機構」の特徴をもつといえる。そのため、障害のある子どもの学校関係者と交渉しやすく、家庭と学校の間の領域を開拓することに成功している。他方で、こうした官学連携型「機構」は、政府の共生論理に協調し、障害のある人を、政府主導で建設する「社区」へ統合することを目指しているといえる。

第4章では、知的障害者支援組織の「慧靈」に焦点を当てる。慧靈は、中国で初めて創設され、全国に多くのサービスステーションを有している。まず、本部のある広州で行なった関係者への聞き取り調査に基づき、その創設と理念、地元社会と政府（障害者連合会）との関わりについて記述した。次に、甘肅省蘭州市に所在するサービスステーションで行なった、参与観察と職員への聞き取りをもとに、慧靈が、成人した知的障害のあるメンバーにとって自立の足がかりとなりうる「職場」としての役割を果たす中間的領域／組織の性質を明らかにした。更に、慧靈は、海外の公益慈善団体から学び、市場とも連携しながら、障害のある人たちの働く場を開拓し、個人の生活の質（QOL）を向上させることを目指していることは注目に値する。しかし、その一方で、慧靈は、知的障害のある人々のQOLを向上させるという理念のもと、「コミュニティ化サービスモデル」を推し進めることを掲げているのだが、輸入した理念が先行し、「社区」と混合させてしまっていることから、職員ですら理念を正確に説明することができない。加えて、QOLを向上させることは、家族から施設へ、施設から地域社会へというプロセスと軌を一にするものであるが、慧靈は、それらのプロセスを段階的ではなく一気に進めようとしているため、理想と現実の間に乖離がみられる。更に、第3章の「機構」と同様に、蘭州市政府の「三社連動」プロジェクト費を獲得し、「社区」

を拠点に、障害のある人たちに限らない支援活動を展開しており、政府の共生論理に協調する側面もあわせもつことが判明した。

第5章では、知的障害のある子を小学校の普通学級に通わせることを目標に、学齢期にある子どもたちにリハビリを施している「機構」のX知的障害児教育支援センター（以下Xセンターと表記）で行なった、創設者とそこへ障害のある子どもを通わせる保護者への聞き取りに基づき、そこが中間的領域／組織としてどのような役割を担っているかを明らかにした。第3章、4章でみた「機構」と異なり、Xセンターは、政府のプロジェクト資金を獲得して支援活動を展開するのではなく、知的障害のある子のリハビリと教育に特化して、個人（Pさん）の裁量で運営している。親は、Xセンターを介して国の障害者政策の情報を知り、民間企業の提供するサービスにアクセスすることができるようになった。加えて、子どもの障害のために生きづらさを抱え、心の扉を閉ざしていた親にとって、Xセンターは、同じ悩みを抱える人や支援者と出会う場となっている。親たちは、Xセンターを通して、家族とも国家主導の制度とも異なる他者との横断的關係への信頼を高めている。しかしその一方で、Xセンターは中間的領域／組織としての自律性が脆弱であることもみえた。

第一部小括では、第1章から5章までの内容を振り返り、中間的領域／組織としての「機構」の役割を、「機構」と国家、「機構」と家族の關係から検討した。「機構」という中間的領域／組織は、国家の政策に協調する一面をもちながら、国家に全面的に協調するのではなく、自らの理念のもとで能動的に障害者とその家族のための支援を実践していることが明らかになった。中間的領域／組織の重要な意味は、家族とも国家主導の制度とも異なる他者との横断的關係への信頼を高め、家族に全面的に依存していたケアに他者が介入する余地を生み出していることである。中間的領域／組織は、個人の生活の質（QOL）の向上や生活圏、人間関係を広げることに寄与しており、周縁化された人々を「社区」へ統合しようとする政府の共生論理（国家・人民統合）とは性質の異なる共生論理を生み出そうとしている。こうした共生論理を創り出しているのは、中国的なソーシャルワークの理念と実践である。国家の障害者福祉における共生論理の根本には「予防」の思想があり、健常者の障害者に対する差別・偏見を助長する可能性があるが、中国的なソーシャルワークの発展により、人々のなかで他者への共感が育まれることが期待される。

第二部は、「新しい社会性」を、障害のある子をもつ家族の個々の生の営みから解明しようするものである。親や祖父母はどのような生き方を選択しているのか、そしてどのような他者と關係しながら、社会とのつながりを回復、調整しているのか、ということをライフストーリーの分析により考察した。これにより、家族が中間的領域／組織をどのように経験しているのか、中間的領域／組織はどのように立ち現れ、どう意味づけられているのかを検討し、「家族回帰」の多面性を論じた。第二部を構成する第6章から9章までは、複数の語り手の語りを切片化してまとめるよりも、一人の語りを全面的に記述し、できるだけ一人ひとりの顔の見えるかたちを採用した。

第6章では、息子をXセンターへ通わせている、ある一人の母親（Aさん）のライフストーリーを取り上げ、専門家（医師、機構の教育者）が障害の受容へ及ぼす作用、家族関係の調整、自己認識の変化等を通して、「障害者の親」ではなく、一人の親として自立していく姿を記述した。

第7章では、成人した息子を慧霊へ通わせている、ある一人の母親（Bさん）を焦点化し、従来の障害者家族研究で語られてこなかった、「障害者の親」から距離を置き、「愛情深い母親」であるよりも、教師としてのキャリアを追求することを生活の中心に置く母親の語りを記述した。Bさんは教師としてキャリア追求をしつづける一方で、息子のケアについては、義父母頼みであり、家族に依存している。つまり、Bさんの個人の自立は、ケアの「家族回帰」のもとで実現されているのである。育児と老後の介護を親子間で担う家族型福祉が浸透していることや、女性も生産労働に従事すべきであるとする中国のジェンダー規範、そして家庭収入を安定させるために夫婦共働きの必要があるという経済的な理由が背景にあることを論じた。

第8章では、祖父母が障害のある孫のケアを全面的に担っているケースに焦点を当て、その中でも父方祖父母（CさんとDさん）へのインタビューの語りを分析し、その息子や嫁、嫁の実家と協力したり衝突したりする状況を記述した。それにより、「下行式家族主義」[閻2017]という特徴が「家族回帰」を促すことがわかった。しかしその一方で、それは直系家族のメンバーの間では成り立つが、嫁と舅姑の間や婚家と生家の間ではうまくいかないことや、祖父母の協力が得られないと母親の過重負担が生じることを指摘した。

第9章では、二人の息子がともに障害を抱え、その理由を追求しつづけている、ある一人の母親（Mさん）の語りを記述した。Mさんは、混沌とする気持ちを抱え、自助努力で息子のケアを乗り切ろうとしつつ、「社区」で障害者に無料で提供されるボランティア人員による芸術活動に息子を参加させることを通して、閉鎖的な家族を超えて血縁関係のない支援者と出会うきっかけを得ることができた。Mさんにとって、家でもない、学校でもない、病院でもない、「子どもが安心して楽しめる場所」が「中間的領域」として現れていた。

第二部小括では、第6章から第9章までの考察に基づき、まず、障害者家族がどのような家族成員以外の他者とながり、情報、助言や支援を得ているかという観点から、中間的領域／組織をどのように経験し、意味づけているかをまとめた。次に、中間的領域／組織と家族の関わりの考察を通して、中国の障害者家族の「家族回帰」の多面性を検討し、次のような結論を導き出した。これまでの障害者家族研究で示されてきたように、「家族回帰」は子どものケアをする母親の過重負担を導くものではない。その理由の1つに、中国ではしばしば祖父母が全面的にケアに関与することが挙げられる。だが、祖父母を巻き込む「家族回帰」は二面性をもつ。すなわち、母親の自己実現を後押したり、子どもの父母が共働きを続けて家庭の経済状況を良好に維持しつづけたりする、利益をもたらす側面と、逆に母親にストレスを与えたり、きょうだい間の交流を疎遠にする等の不利益をもたらす側面である。一方で、

もし祖父母の全面的協力が得られなければ、両親のどちらかが主婦／主夫となって子どものケアを中心とする生活を送ることが必要であるが、その場合でも、家族が孤立した、閉鎖的な空間における「家族回帰」というよりは、中間的領域／組織との相互行為により、少しずつ外へ開放される「家族回帰」へ変わりつつあることがみえた。また、他人と婚姻関係を結んだ後、配偶者やその親族が障害のあるきょうだいを無条件で受け入れるとは限らず、「家族の連帯」は難しいと考える人もおり、「家族回帰」が永遠に続かないことを示唆していた。閻の「家族回帰」は再考されるべきであることを物語っている。

終章では、以上の議論を踏まえて、まず、中間的領域／組織と「家族回帰」の関わりの観点から、障害者とその家族の「新しい社会性」の内実をまとめた。次に、本論の「新しい社会性」の内実に基づき、閻の提唱した「中国社会の個人化」論を再考した。最後に、本論で得られた知見を、社会主義体制から資本主義体制へ移行する過渡期的な社会、文化の実態に切り込んだ「ポスト社会主義人類学」の俎上に載せて、中国のポスト社会主義的状况の特殊性を、「中国社会の個人化」と中国的ソーシャルワークから検討した。その結果、明らかにした内容は、以下の通りである。

本論で論じてきた中間的領域／組織は、国家と「機構」によって協同で形成されているが、国家による管理や国民統合・国家統合という共生論理が常に前景化されているのではなく、新自由主義の経済政策のもとで、基本的には人々の自助努力と自己責任を強調し、市場競争に人々を動員する回路を作ることとするようなものでもない。「機構」は、個人や家族の個別のケースに寄り添い、支援の対象となる人の社会関係を広げるために関係者と調整をすることにより「つながりの回復」を促している。家族の限られた資源に限界を感じて障害のある子や孫の将来に希望をもつのを諦めるのではなく、専門家や支援者、そして同じ悩みを抱える人たちとつながる機会を得られるようになったことが、「新しい社会性」として当事者の前に現れている。それは、障害者とその家族のための生き方の選択肢を増やし、「家族回帰」の多面性を導いている。